

妻がある時から奇声を発するようになった。「キツキツ、キツキツ」と大きな声で、それもどこか彼方に目を泳がせながら何度も「キツキツ、キツキツ」と。これはまずいと動揺したが、本人はどうやらアカゲラと会話をしたがっているようだ。それ自体も怪しい行動なのだが、その気持ちもわからなくは無かった。妻はアカゲラにも名前をつけていた。「ぼんちゃん」という。名前の由来はアカゲラが飛ぶ時の姿で、始終羽ばたいているのではなくバタバタと数回羽ばたいた後は羽をたんでロケットのように進むのだ。その姿を言葉で表すと「ぼーん、ぼーん」と飛んでいるようだと言うのだ。それでも毎回同じアカゲラが来るわけではなく、頭のとっぺんが赤い雄と、黒いままの雌がいるし、明らかに体格が違うのも来る。でもそれはみな「ぼんちゃん」で、雄のぼんちゃん、大きなぼんちゃん、で済ませている。まあ、それはそれで良いのだけれど、それだけ思い入れたうえ、季節を問わず家のすぐ近くまで来てくれるとなると、話してみたくなる。どうもこちらも洗脳されたのか、妻が「キツキツ、キツキツ」と言うと、ぼんちゃんも「キツキツ、キツキツ」と返してくるように聞こえる。何を言っているのか妻に聞くと「脂身はまだですか。」だと。まあ、それは確かかもしれない。

それから妻はアカゲラについていろいろ知りたくなって図書館でいろいろな本を借りて来た。その中の一冊を差し出して「これ見て」と言われたのが、アカゲラの舌の図解だった。アカゲラは頭を激しく振って尖った嘴で木に穴を空けるのだが、それで脳を痛めることもあるようだ。それだけ必死に穴を空けた後、中にいる虫を食べるのだが、そのために特殊な舌を持っているのだ。舌の先は釣り針の返しのようにフックできるように曲がっていて、その舌を長く木の穴に差し込んで虫を食べるのだそうだ。その長く舌を出すための機構として長い舌を鼻から後頭部をぐるっと回るように収納しているのだ。確かに、アカゲラが脂身を取り出すところをアップの動画で写したことがあるが、それはまるで爬虫類の舌だった。アカゲラは「きもかわいい」のだ。

妻の話し相手はアカゲラだけではなく、ヒヨドリもそうだ。ただ、ヒヨドリの鳴き声は「ギーツ」とか「ヒーツ」なので、さすがに大声で会話するのははばかられるようだ。ヒヨドリはなんとやっているのか聞いてみると「リンゴはまだですか。」だと言う。同じじゃ無いか。まあ、それ以上に高等な会話をする必要が無いのかもしれないが。ヒヨドリといえば、東京などの大都市でも始終良く見かけるが、もともとは森と平地を季節ごとに行き来していたようだ。それが一九七〇年頃をさかいに年中まちなかにいるようになったようだ。なぜそうなったかには諸説あるようだが、餌に不自由しないし、人は天敵にはならなかったからという説がある。竹山で見られるヒヨドリも通年で見られるので同じように生態が変わってしまったているのかもしれない。ただ、東京の都心での鳴き方は非常に強く威嚇的に「ギャーッギャーッ」鳴きあっていたが、ここではストレスが少ないのか会話的な鳴き方をしているように感じる。



鳥たちは自分の好みのお立ち台を持っていて、そこでよく鳴く。歌の名手のオオルリやクロツグミは敷地の中でも一、二の高さのミズナラのでっぺんがお気に入りようだ。そこからよく通る声で歌うのはさぞかし気持ちが良いと思う。一方、歌はお世辞にもうまいといえないが、しきりに鳴くのが好きなヒヨドリは、何を思ったか我が家のテレビのアンテナをお立ち台として選んだ。声からしてパンク系を自認しているのか。そういえば、アカゲラは木を「コンコンコン」とテンポよくつつくドラミングを得意としてるが、なかにはお隣の金属電柱を甲高い音で叩くのが好きなのがいる。若い鳥たちの間ではニューウェーブが生まれているのかもしれない。アンテナをお立ち台としたヒヨドリは見上げて聞いていた妻にウンチを落とす。かなり破壊系のような。思いつきり声をあげると腹に力が入るのか歌の途中でウンチをする鳥はヒヨドリだけではなく結構いる。おかげでアンテナの下の玄関階段の隙間から桑の木が生えて来て慌てて広いところに移植した。

鳥たちはどんな歌を歌っているのだろうか。鳥には言語があるという最近の研究もあるみたいだが、それだけでなく鳥たちには何か歌の美学があるような気もする。わかりやすいのはウグイスだ。例の「ホーホケキョ」なのだが、春先の若鳥にはそううまく鳴けないのがある。妻は「フォトビジョン」と鳴いているというのだが、まさかと思つて聞いていると、そう聞こえなくも無い。「ホー」のところのタメがうまくできないのだ。でも、何度もなんども鳴いているうちにだんだん上手くなってくる。難しいのは後半だ。「ケキョケキョケキョケキョ」と、よく息が続くと思うぐらい長く鳴く。ただ、そのうち「ケキョ・…ケ、ケキョ」と不安定になってくる。歌の最後をどのように終われば良いのか迷っているうちにわからなくなってしまう。そんな感じに聞こえる。これが名手になると「ケキョケキョケキョケキョ」を長く弱まりもせず一気に歌い上げるのだ。歌の先生がいるのか、皆練習を重ねて上手くなっていく。

鳥たちがよく鳴くのは早朝で、その一斉に鳴き出す様は「朝のコーラス」として知られているか、夕方もよく鳴く。ただ、聞いていると朝と夕方ではニュアンスが違うような気がする。朝は力がみなぎって希望に満ちた鳴き方だ。朝からナンパに精を出しているのだとは思うが、暗闇が空けまた新たな一日が始まる喜びを高らかに歌い上げていると思つてみたくなる。一方、夕方はクロツグミのの歌を聞いていると、吟遊詩人のように今日一日の出来事を振り返り、音に乗せ語っているように思える。「あんな楽しい思いもした、こんな危ないこともあった、でも、良い一日だったね」と。そう、私たちも良い一日だったよ。

春に鳴き声を聞くとホッとする鳥がいる。オオジシギだ。遠くオーストラリアあたりからノーストップで飛んでくる渡り鳥で、途中、嵐に巻き込まれて命を落とすものも少なく無いようだ。「ギ、ギ、ギ、ギ」と鳴きながら大空高く舞い上がり、一転急降下する。その時の翼の風切り音が「バババババ」と凄まじい。孤独な長旅を経てパートナーを探す姿にどこか哀愁を感じる。



鳥たちをよく観察できるのは冬だ。木々の葉が枯れて落ちるので鳥が丸見えになる。それに餌台で寄せているので間近まで来ることになる。餌台は三つ用意している。野鳥に餌をやるのはどうのこうのと言っているのに三つもかと言われそうだが、それには私たちならの理由がある。家の近くまで良く来るのはヒヨドリと、シジュウカラなどの小型の鳥と、アカゲラなどのキツツキだ。それぞれに体格も違うし好みも違う。ヒヨドリにはリンゴなどの果物、シジュウカラたちにはヒマワリやアワなどの粒餌、アカゲラなどには脂身と、それぞれ毎に餌台を別にし、互いの距離も保つことで余計な争いを起こさないように考えた。また、台の構造も横枝に止まるタイプと幹に止まるタイプというようにそれぞれの鳥の足の構造に合わせて工夫してみた。

最初は、餌のやり過ぎは良く無いと、少しだけあげるようにした。そうするとシジュウカラやハシブトガラやゴジュウカラなどは餌台の周辺の木に一旦止まり、それから餌台に来るのだが、ほとんど一斉に来ることはない。誰か一羽が餌台に行つて餌を啜えて枝に戻るのを、他の鳥は待っていたのだ。そして、順番に餌台に行つて平和な食事の時間で終わるのだ。これは一回だけのことではなく良く見られた。雪が深く寒さも厳しくなつて、つい、いつもより多めに餌を入れてみた。皆喜ぶだろうなと思つたら、今まで大人しく譲り合つて順番に餌台に行つていたのが、一斉に来て、互いに相手を牽制し時には攻撃的に威嚇して沢山の餌を独り占めしようとし出したのだ。偶然いろいろなることが重なつてそういう行動になつたのかもしれないが、何か考えさせられる出来事だつた。食べるものが少ないと分かち合い、不自由ないほど食べるものがあるとなれば独り占めしたくなる。そう見えないこともない。

餌台を三種にして距離を離れたのは一定の効果があつたようで、互いに他の餌台に行くことはなかった。ところが、そこにカケスが登場すると状況は一変した。カケスは数羽でグループをつくつて行動するのを良く目にする。体格も一段と良い。私たちはそれを「カケス三兄弟」と呼んでいたが血縁のほどはわからない。彼らはどの餌台も御構い無しに食べ散らかす。そして、ある程度食べ終わつても餌台に居座り、他の小鳥たちが近づこうとすると威嚇して追い払う。この餌台は我々もものだと言わんばかりの態度だ。

餌台を守ろうという気持ちはヒヨドリも同じだが、態度はぜんぜん違う。リンゴの餌台の近くの枝に止まつてじつと餌台を見守っているが、小鳥がリンゴに近づいても飛んで行つて追い払うまではしない。ただ、羽がプルプル震えているので嫌がっているのは間違いないさそうだ。ただただ餌台の近くから離れずにじつとしている。それも冷たい雪がふりつけようがじつと耐えている。不慣れな感じのするやつだ。

そんな冬のある日、外出から帰つて玄関先まで来たら、突然、ゴジュウカラがまっしぐらに私の方に飛んで来て、頭の上に止まつて肩に降りこちらを見るではないか。餌もないのに。少し鳥の気持ちに近づけているのだろうか。

